

# 全電源喪失の記憶

証言 福島第一原発

## ■第4章「東電の敗北」

3月14日午後8時前、福島第一原

発免震重要棟には約700人の東京

電力社員と約150人の協力企業作

業員がいた。消防車の燃料切れで2

号機原子炉への注水が1時間半以上

も途絶えていた。最悪の事態が間近

に迫っている。

所長の吉田昌郎(59)は席から立ち

上がる。対策本部を出た。

事故発生から4日間、プリントメ

「カーや警備会社、消防車による注

水作業を担った子会社など協力企業

は昼夜を問わず作業に当たってい

た。

だがこれ以上、巻き込むわけには

いかない。

## 免震棟から避難準備整う



# 受け入れは第2原発

2階の廊下や階段は多くの作業

員が座り込んでいた。吉田は彼の

前に立って言った。

「今までの対応、ありがとござ

いしました。もうお帰りたいので結

構です。途中で道路が陥没している

ところもあると思います。十分、気

をつけて避難してください」

既に作業員たちの間では「どうも

やばい状況みたいだ」と臆測が飛

び交っていた。

だが吉田は事態の深刻さなどみじ

んも感じさせない穏やかな口調で最

後にもう一度、「ありがとござい

た。福島第一原発から第2原発への避難

▲に使われた協力企業のバス。第一原

発構内に保管されている。6月上旬

ました」と言って、深々と頭を下げ

た。

作業員たちは午後8時半ごろまで

た。パンの恐れもあり、約150

に、構内の駐車場に止めた自家用車

が離れた構内道路に止めた。

バスが用意できたことを知り、

吉田は総務班長に尋ねた。

「このメンバーを退避させられ

る場所はあるか」

総務班長は広野火力発電所(広野

町)と福島第2原発に連絡した。ど

ちらも受け入れ可能だったが、第2

原発では傷病者を収容する施設や、

傷病者以外を受け入れる体育館、ス

タツの準備が完了していた。

「2F(第2原発)は大丈夫です」

総務班長がそう伝えると、吉田は

「そこか」と静かに応じた。

こうして退避の準備が水面下で整

った。実際に退避が始まる約10時間

前のことだった。(敬称略。年齢

免震棟前にバスを横付けしたか、

肩書は当時。共同通信 高橋秀樹)